
スカイブルーの記憶

つちのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカイブルーの記憶

【Nコード】

N7602P

【作者名】

つちのこ

【あらすじ】

京都の大学に通う「あたし」と、自由気ままにバーを経営しながらも、生きていることに漠然とした不安を感じている「あなた」との出会いと別れ。

「あなた」がこの街をはなれて旅に出してしまうことは避けられなかったのか？

ぼんやりとした寂しさで感覚を鈍らせながら、あたしは京都の街をぶらぶら歩きながら、ふたりの一年を思い出す。

そのうちに「あたし」のなかで、あたしは忘れてしまっていたひと

つの「あなた」の記憶に触れる。

はじまりの雨

雨が降りそうな空。

ぶらぶらと歩いている街がすっかり灰色で、見あげてみた空に、
「冬なんだから、雨が降るから暗いのではなくって、季節のせいなんだ。」

と、ひとりつぶやいた息を吐き出す。

あたしたちが、ふとした寂しさから陥ってしまった落とし穴。

一年前の昨日のこと、

さめざめと小雨が降る中、傘もささずに季節はずれなほど生温かい三条を後にし、そして、けだるく起きた初めてのふたりの朝。

その夜、電話で呼び出された居酒屋のお座敷の畳は、かなり古びていた。

かさかさに傷んだ肌をなでるように、イグサの網目に指をすべらして聞いていた、愛のはじまりの言葉は、

「君のためにも僕たち会わない方がいいと思うんだけど」

という緩やかなカーブの先にある、墓標のようなものだった。

周りの人に言えるようになるまで、かなり時間を費やしたんだ。

この街に越してきたばかりのあなたには、そんなクダラナイしがらみはなかったのかもしれないけれど。

いつものこと。

あたしの学校が終わると、待ち合わせもしないまま、近くのカフェでお茶をした。

その日からあなたはいつもアイスコーヒー、あたしはココアフロートをスプーンで食べる。

そのあとは、すっかり真っ黒に日焼けした手に包まれて鴨川の土手

に座り、ビール片手にちっちゃな打ち上げ花火を見た。

あたしには媚薬がついてるとクンクンする彼の鼻に「ちゅ」をして、あなたの左がそつと開くと、そこにすべりこむあたし。

こうして時間は過ぎていった。

数えられないほどのキス。

数えられないほどの笑い声。

数えられないほどの涙。

「あたしとあなたは、いつまで一緒にいれるんだろう？」

「そんな先のことどうだっていいよ。そつと終わっていくこの一年をふたりで見送ろう。」

と、やさしくいつものようにキスをして強く抱き寄せて欲しかった。

ひとりで歩く琵琶湖疏水沿い。

なかなか雨は降りそうにない、あなたのいない街。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7602p/>

スカイブルーの記憶

2010年12月30日23時48分発行